

身近なまちの風景物語(23)

たまゆらの転換

川沿いの山裾を蛇行しながら視界に入る風景が移ろう。車窓の変化は、運転する楽しみの一つである。

遠い昔から、川に沿った道が隣の村やまちをつないだ。人や馬の往来、そして車が増えるのに伴い道も整備される。山肌を削って道幅を広げたり、土砂崩れを防止したり、山裾や山腹にトンネルが掘られたり。

ただトンネルはそうした場所ばかりではない。

ふと目の前に、行く手を遮るように立ちはだかる山並みが現れた。行き先はこの山の向こうだ。峠越えの山道だろうか。山の切れ目もわからない。

次第に山が大きくなる。どうなるだろう。

すると正面に小さな穴が見える。道がまっすぐその中に向かっている。トンネルだ。

左右はガードレールで挟まれ、逃げられない。入るしかない。吸い込まれるように穴に突入。

中はどうなっているだろう。何が待っているだろう。気分はテーマパークの乗り物のようだった。これが初めて突入した時の気分である。

あまりに巨大な自然の中で、この人工物は小さくて謙虚だ。というよりトンネルの大きさは一般的かも

しれないが、それに比して左右に広がる山並みが巨大だった。

トンネル内はほぼ直線。ただ入る前から、また入ってからも緩やかな上り勾配なので出口が見えない。どこまで上るのか。やがて頂点になり、今度は下りになる。ようやく明るい穴が見えた。出口だ。

抜け出た後はどんな風景だろう。胸が高鳴る一方、緊張する。待ち受けていたのは、果実を育てるビニールハウスと果樹園が広がる風景だった。

新治(土浦市)と八郷(石岡市)を結び、市境をまたぐこの朝日トンネルは2km近い。かつての峠越えの道路は急カーブで、冬季には積雪や凍結の恐れがあった。

長いトンネルは排水などのため、二つの出入口から上り勾配になっている。そのため入口から出口が見えない。

トンネルの前後で、二つの風景が切り換わる。トンネルを抜けると雪国かもしれない。何度通っても、数分間の新鮮な緊張感を味わわせてくれる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）